

# 令和3年度「高等学校段階の病気療養中等の生徒に対するICTを活用した遠隔教育の調査研究事業 成果報告書（概要版）」

## 京都市教育委員会

### 1. 背景・目的

京都市内の病院に入院した高校生に対しては、在籍校からの支援を基本としながら、京都市立桃陽総合支援学校（病弱特別支援学校として設置されており、京都大学附属病院等の病院内に分教室を設置。）からの支援を行っている。本事業においては、同校に配置された「医教連携コーディネーター」による支援を中心として、医療機関・在籍校・保護者等との連携体制の構築を図りながら、病弱教育やICT機器活用の観点から相談・支援を実施している。

### 2. 事業の内容及び成果

令和3年度の桃陽総合支援学校による高校生支援・教育相談に関する実績は、以下のとおり。（支援事例数：計19件）

- 分教室設置病院（小児科）に入院する高校生への支援：10件
- 分教室設置病院（小児科以外）に入院する高校生への支援：5件
- 分教室設置病院以外の病院に入院する高校生への支援：4件

＜同時双方向型配信授業 連携・支援の例＞

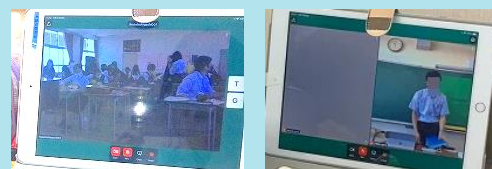
#### ①病院と高校をつなぎ高校側の機材設置場所を確認



#### ②テレプレゼンスロボットを使った授業配信を実施



高校側



病院側（授業視聴画面）

#### ③復学カンファレンスを実施。主治医より今後の治療や登校時の配慮など説明



具体的な取組内容及び成果は以下の（1）～（5）のとおりである。

#### （1）遠隔教育を実施するために有効な関係機関の連携体制の構築に向けた取組

- ・桃陽総合支援学校のセンター的機能を活用した高校生支援及び医教連携コーディネーターの存在については、一層周知が進み、京都市立高等学校、京都府立高等学校のほか、他府県の高等学校等とも円滑な連携を図ることができている。桃陽総合支援学校からは、配信方法や病院との連携方法について情報を提供するとともに、配信機材の貸出しなどの支援を行った。
- ・対象生徒の主治医と高等学校をつないだカンファレンスの実施は、高等学校からのニーズも高く、小児がん拠点病院においては、医教連携コーディネーターがコーディネートする医教連携カンファレンスにより丁寧な取組を進めてきた。カンファレンスの前半は主治医と高等学校による情報交換、後半は当該生徒・保護者も参加し、入院中の学習計画等を共有する形で進めており、入院する高校生の心理的安定にもつながっている。
- ・大学生ボランティアによる「高校生学習会」については、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により対面による実施が難しく、ピアカウンセリングとしての効果も期待してオンラインにて実施した。学習会に参加した高校生からは、「心が和んだ」「気分転換になった」という声もあり、学習面の支援だけでなく、入院する高校生の心理的支援にもつながった。

## (2) 遠隔教育における学習状況の確認方法及び評価についての検証

- ・同時双方向型の配信授業実施校に事後アンケートを行い、遠隔教育における学習状況の確認方法及び評価の検証を行った。(アンケート実施校数：14校)
- ・実技授業においてどのように学習状況を確認し、評価するかについては、授業見学及びレポート提出により確認・評価を行うケースが多かった。教科担当者が選んだ動画等を視聴させた後、レポートの提出をさせるケースもあり、今後も取組事例を収集のうえ、発信を行う。
- ・遠隔教育を実施した全ての高等学校から定期考査の実施に関する相談があった。桃陽総合支援学校からは、同時双方向型の配信授業と同じ方法で在籍校とつなぎ、クラスの時間割に沿って同日の同時刻に、クラスのテスト監督の指示で実施する方法を高等学校に提案し、この方法により円滑に定期考査を実施することができた。

## (3) 通信環境

- ・遠隔教育の実施に当たっては、多くの事例において、高等学校・病院ともに桃陽総合支援学校からモバイルルーターを貸し出し、配信授業を行った。モバイルルーターは、配信場所や受信場所により通信の遅延や切断などのトラブルがあり、通信環境の改善について引き続き検討が必要である。

## (4) 授業配信機材

- ・一部の事例において、タブレット端末とテレプレゼンスロボットの使用により、板書の見たいところを見ること、先生の呼掛けに振り向くことなどができ、生徒が学級を身近に感じることができた。また、音声については、教員が無線型のマイクを使用することで、クリアな音声で配信することができた。

## (5) 心理的支援につながる配信授業内容の検証

- ・支援を実施した高等学校のアンケートでは、同時双方向型の配信授業について、実施した全ての学校が「必要である」と回答した。学習面に関する意見のほか、「生徒がクラスの一員としての自覚が持てた」など生徒の心理的支援につながったとする意見が多く見られた。
- ・支援を受けた生徒からも「学校とつながることで授業の進度や学校の様子がわかった」という意見があるなど、同時双方向型の配信授業は、入院する生徒の心理的支援に有効であると考えられる。

## 3. 今後の課題

- ・小児科以外の病棟に入院する高校生や、分教室設置病院以外の病院に入院する高校生への学習支援については、遠隔教育の制度及び実施方法、これまでの桃陽総合支援学校の支援の実績などの情報提供が必要であることが、今年度の事例を通して明らかとなった。関係機関に求められる情報を提供できるリーフレットを作成・配布するなどして、理解啓発を進めていきたい。
- ・分教室設置病院以外の病院においては、桃陽総合支援学校から遠方の病院の場合、同校による直接の支援が困難であり、定期考査の実施の際などは病院側の看護師等の協力が必要であった。病院側の負担が大きいケースもあり、支援体制について関係機関で検討する必要があると考える。
- ・同時双方向型の配信授業において、通信環境が悪いために起こる通信の遅延や切断は、引き続き、配信機材の工夫等により改善のための検討が必要である。
- ・学生ボランティアによる学習会は、入院する高校生の心理的支援にも有効な取組であり、特に成人病棟などで同年代との触れ合いが少ない生徒等への支援の成果について検証を進める。
- ・同時双方向型の配信授業の実施方法や成果については、これまでから積極的な情報発信を行ってきたが、引き続きホームページでの高校生支援に関する取組の広報に努めるとともに、取組内容について記載したリーフレットの作成・配布により、理解啓発を進めたい。

本事業は、文部科学省の委託を受け、実施したものです。

報告書の詳細は、下記URLからご覧ください。

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/main/006/r01/1422837\\_00003.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main/006/r01/1422837_00003.htm)

